

東川町における森林資源の可能性と課題

北川泰治郎*・畑山 英嗣**・細川 慶和**
眞坂明日香**・杉澤 達也**・伊東 秀起**
若林 望**・太田 圭治**・吉田 義春**

1. はじめに

2015年2月に締結された北海道財務局と小樽商科大学における包括連携協定を基に官と学の連携による共同研究を継続しているが、その一環として森林資源の利活用と地域の経済効果についてディスカッションや調査を重ねてきた。2015年には北海道の旭川市、下川町、そして東川町にある森林を利活用しているNPOや株式会社の機関へインタビュー調査を実施し、観光の側面から森林資源を活用した誘客要因について調べたが、その地域のインタビュー調査の結果、遠方から観光客を呼び込んで交流人口を増やしていくには地域の「ブランド化」や「特異な魅力」を築かなければ難しいと考えられた。また、「よそ者」と言われる地域の人材によりダイナミックに、そして外部の目線でその地域がアピールされていることも確認された。

さらに移住者による定住人口増加の東川町については、一時的な誘客である観光とは別の側面で森林資源が作用しているのではないかと考えられ、当共同研究チームはこの点に着目し、2019年10月～12月にかけてその東川町内でインタビュー調査を行った。北海道の人口減少は全国と比較して早いスピードで進んでおり、この人口減少については多くの道内自治体が頭を悩ませ、若しくは

* 国立大学法人小樽商科大学グローバル戦略推進センター

** 財務省北海道財務局

人口減少を前提に施策を進めていることであろうが、森林資源という側面からこの東川町の特異性を確かめていくこととする。

2. 東川町の概要

東川町は、北海道のほぼ中央に位置し、東部には山岳地帯を有し、大規模な森林地帯を後背地としている。東川町には、北海道の峰といわれる大雪山連峰の最高峰「旭岳」が所在しているほか、日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の区域の一部となっており、豊富な森林資源と優れた自然の景観は観光資源として高く評価されている。東川町の中心市街地にある町役場を起点として、東には「旭岳」と二つの温泉郷「天人峡温泉」, 「旭岳温泉」が車で30~40分程度の位置にあるほか、西には北海道における人口規模で第二の都市である旭川市のJ R旭川駅まで車で30分程度、南には旭川空港まで車で13分程度の立地環境にあり、都会にも大自然にも距離が近いことが特徴と言える。

東川町の人口は、1950年の1万754人をピークに減少が続き、1994年には7,000人を下回ったが、豊かな自然環境と景観に配慮した宅地造成や起業支援、子育て環境の整備などにより、そこから持ち直し、2019年4月末現在で8,356人と、この四半世紀で約20%増加している。東川町では、8,000人の人口を維持しながら、交流人口を拡大することで小さな経済圏を循環させる「適疎な町」を目指している。

2015年10月には、旧東川小学校校舎の跡地を利活用し全国初となる公立の日本語学校である東川町立東川日本語学校を開校し、これまで多くの外国人留学生を受け入れている。町内での外国人留学生との交流を増やすことで地域での活動が増え、定住人口を支える長期的な展望があるほか、留学生に対しては国の支援を受けた奨学金を地域限定のポイントカード「東川ユニバーサルカード（HUC：フック）」の形で支給するなど、町内での消費を通じて域内経済を循環させるよう取り組んでいる。

東川町の産業では農業が盛んで、大雪山旭岳を中心に降った雪や雨が何十年

もかかって地下浸透したミネラル分の豊富な伏流水を活用し、米や野菜を生産している。1895年（明治28年）の開拓の翌年から実験的に開始した稲作は、かつては小さな田んぼで稲作を行っていたが、1963年、町を挙げて水田の大型化に取り組みはじめ、1974年（昭和49年）に北海道で最も早く基盤整備が完了した。そのほか、地域の農家が一丸となって取り組んでいる農業生産工程管理手法（GAP）の導入や2012年に道産米として経済産業省特許庁の地域団体商標の第一号となった「東川米」など先進的な取組を行い、米と野菜の複合経営で農家所得を確保するよう努めている。

東川町では木工業も盛んであり、多くの家具職人が集い、デザイン性、芸術性の高い家具を作り続け、全国的に名高い旭川家具全体の約30%が東川町で生産されている。また、大雪山を望む美しい風景に惹かれ、木工クラフトや陶芸などのクリエイターが東川町に移住しアトリエを設けている。2006年に始まった「君の椅子」プロジェクト¹⁾においても、椅子の製作を町内の工房が担っているほか、中心市街地の街並みには「木彫看板設置事業」による施設や店舗の特徴を表した手彫りの看板が、クラフト職人の手伝いのもと制作されているなど、町の施策が地域内での経済活性化につながっている。

また、東川町は、1985年には世界にも類のない「写真の町」を宣言し、「町民が参加し、後世に残し得る町づくり」として、自然や文化、そして人と人との出会いを大切に、「写真写りの良い町づくり」を進めている。2014年には、新たに「写真文化首都」を宣言し、写真文化の中心地として、「世界中の写真、人々、そして笑顔にあふれる町づくり」に取り組んでいる。具体的には、「東川町国際写真フェスティバル」や「全国高等学校写真選手権大会」（通称：写真甲子園）を始め、町民によるイベントも多数開催するなど、東川町の住民や団体、組織、コミュニティの活発な活動が見られている。このほか、ふるさと納税を活用した「ひがしかわ株主制度」を設け、町外からの寄付により投資資

1) 生まれてきた子どもの誕生を地域で祝い、旭川家具の職人による世界に一つだけの手作りの椅子を贈るプロジェクト。

金を獲得しつつ、町外の人々との関係を築いている。

こうした東川町の特徴は、町外からの移住者を惹き付けており、いわゆる「よそ者」による個性的なカフェや飲食店等の起業により「東川スタイル」²⁾と言われる特徴的な文化を形成していると言われている。

3. インタビュー調査の報告

インタビュー調査にあたっては東川町の協力を得ながら、東川町内で森林と関わっている機関や人物を絞り込み、当共同研究チームで選定した。選定基準は、森林資源を直接的若しくは間接的に事業として活用しているか、さらには外部から来た、「よそ者」としての要素があるか、大きくはこのいずれかの要件に合致するインタビュー調査先をリストアップし、分野が異なるように留意した。また、地域や住民に寄り添った公共サービスを追求し、独自の施策や事業を実施している東川町役場 東川スタイル課にもインタビュー調査を実施した。

(1) 株式会社 北の住まい設計社 渡邊社長 インタビュー

【これまでの経緯】

- ・ 東川町が廃校の利活用を目指していた中、知人の勧めなど人の縁があり、東川町へ移住した。デザインに携わっていた経験から東川町で家具作りを始めようと思ったが、当時、この場所には木がなかった。そこで、「家具の原料である木を育て、森を作ろう」との思いに至った。
- ・ 移住当初は、ゼロからのスタートであった。知人の紹介でスウェーデン人のデザイナーを1年間招聘し、作製した家具の作品展が好評だったのを契機に、日本中から引き合いが増えた。無垢材、職人の手仕事、天然塗料の仕上げと

2) 玉村雅敏・小島敏明『東川スタイル 人口8000人のまちが共創する未来の価値基準』産学社 (2016)

表1：インタビュー調査先と事業・業務概要

	インタビュー調査先	事業・業務概要	インタビュアー
森林を直接的に 利活用	株式会社 北の住まい設計社 代表取締役社長 渡邊 恭延 氏	家具の製作、卸販売 住宅パーツの製作、販売	◆北川 □小野寺
	東川町森林組合 総務兼業務課長 斉藤 仁泰 氏	造林、素材生産	□杉澤, 畑山
森林を間接的に 利活用	natures. 中川 伸也 氏	山岳ガイド、カフェ運営 プロスノーボーダー	◆北川 □伊東, 細川 小野寺
	株式会社ABK 代表取締役 阿部 雄太 氏	原木椎茸・食肉生産	□杉澤, 畑山
	モンベル 大雪ひがしかわ店店長 田中 尚人 氏	アウトドアスポーツ 商品の販売	◆北川 □細川, 小野寺
よそ者 (移住者)	東川町役場 写真の町課 吉里 演子 氏	大阪府出身 写真甲子園出場経験者 文化ギャラリー学芸員	□伊東, 細川
	東川町役場 海外誘客推進本部 山口 ちえ 氏	元NPO勤務 まちづくりコーディネーター	□杉澤, 畑山
行政	東川町役場 東川スタイル課長 菊地 伸 氏	公共サービス 独自の施策や事業	◆北川 □細川, 小野寺

※インタビュアーの所属先は、◆=小樽商科大学、□=北海道財務局

いう当時としては他にない表現であったことが評価された理由だと思う。

- ・着色せずに色のある家具を作りたくて、アメリカの良質な木材を求め、家具を製作していた。もっと永続的なモノづくり、環境に負荷をかけないモノづくり

をすべきとの考えにより、2010年に「北海道の木以外では家具を作らない」と宣言し、北海道の無垢材を100%使った家具メーカーになろうと転換した。これまで売れていた商品をやめたため茨の道になったが、「環境」をしっかりと考えて次の世代へつなぐことも自分の役割ではないかという思いがあった。

【道産材について】

- ・北海道の木は年輪の幅が小さく、良い木だが、近隣から簡単に仕入れられる環境にはない。そんな中、厚沢部町の木材会社の木を大切に作る気持ちに共感し、売れる先のない材を購入し、家や家具を作っている。
- ・これらの木材を支えているのは北海道大学の雨龍研究林であり、樹齢250年くらいの丸太を買っている。こうした太くて長い丸太は規格外であるため、製材する工場が東川町の近郊にはないことが課題である。北海道内には製材工場はあるが、こうした木材も製材できる工場が近隣にあれば良い。

【東川町との関係、今後の展望】

- ・東川町は、子供たちを一生懸命教育しており、東川町の良さを、森遊びなどをしながら教育してくれている。
- ・我々は木を育てるという原点に立って家具づくりに携わり、厚沢部や雨龍研究林など様々な関係者とつながっている。年代を積み重ねた木の価値は、人間の一生よりも長い時間の価値を持っているということを知って欲しい。集成材で建てる家も悪いわけではないが、それとは別の世界があると思っている。

(2) 東川町森林組合 斉藤総務兼業務課長 インタビュー

【東川町民有林の状況】

- ・東川町は民有林が少なく、町有林と民有林合わせて3,500ha程度しかない。人工林は、昭和40年頃に植林した木が多く、現在、樹齢45～50年になる。あと10年もすると、皆伐、植え直しをしなくてははいけない。以前、東川町では、

森林組合運営の悪化により森林整備が遅れ、その結果、樹木の成長が遅れたという歴史がある。森林整備が行き届いた地域と東川町とを比較すると樹木の太さなど成長度合いが全く異なる。

【民有林管理の課題】

- ・ 東川町に移住者が多い理由は、東川町の「環境」と「水」のおかげだと思う。この「環境」や「水」を育てているのが「森林」である。
- ・ 東川町でも、外国資本による山林買収という噂もあるが、町が購入する山林は、外国資本に買収されたら困るような大きな山林のみ。町が購入しないような小さな山林は森林組合が対策を考えていかなければならない。
- ・ 組合は事業利益を財源として山林を購入。購入した山林は教育展示林として、森林の水土保全機能を高める新しい森林制御方法などを示しながら、事業を推進していくという形。

【組合事業運営上の課題】

- ・ 組合の事業活動は、森林整備補助金と素材販売を収入としている。事業は、木材の伐採や売却というよりは、維持管理が中心。国の補助制度を活用しながら「森林」整備を実施しているが、「維持管理費用」が増加すると、組合員である山林所有者の負担が増加し、これにより森林整備への理解が得づらくなる。結果、山林を手放したいという所有者が増え、森林が荒れ、災害で土砂崩れが発生する原因にもなる。「防災」目的のためにも、国の補助金は「新設」に限らず「維持管理費用」も補助対象にしてもらいたい。

【森林を活用した地域経済活性化】

- ・ 定年退職した方など、森林で、みんなで手ノコなどを持って木を伐採し、楯木を作り、キノコを栽培してもらおうといった遊び感覚で趣味と実益を兼ねるアクティビティも良いのではないか。ミズナラなど自然に育つ木が林道の支障となる場合に、木を伐採することにより林道の陽当たりが良くなり、乾燥

して丈夫になる。木の伐採は、森林の維持管理にもつながる。

- ・林道を整備のうえ、クロスカントリーコースへの活用という話も聞く。山林を活用して、町外から人を呼ぶ「何か」があれば良いと思う。

(3) natures. 中川氏 インタビュー

【東川町との関わり】

- ・キトウシ森林公園を何とかしたいという想いがあり、東川町のこの場所にガイド業と飲食店（アイス屋）を構えた。
- ・素晴らしい大雪山や旭岳は、道具を揃えなければ登れないなど、敷居が高く、身構えてしまうところがあると思う。そこで、いずれ大雪山や旭岳へ行く道筋をつけたいと考えている。例えば、2時間のツアーやダム湖でSUP（サップ）³⁾を楽しむツアーなど、この場所をスタートして、この場所に帰ってくるツアーをできないかと思いガイド業を始めた。
- ・山と普通の生活のインターフェースになっていきたい。自然で遊びたい人にとっては道具の用意が大変なので、手軽に楽しめる環境を作りたい。子供たちはきっかけがあればもっと山で遊んでもらえるようになるかもしれない。

【キトウシ山の構想】

- ・東川町は大雪山国立公園や旭岳を擁し、名立たる観光地に近いという高いポテンシャルを持つ一方、体験型観光施設が少ない。大雪山国立公園は国立公園であるが故に利活用に制限があるが、ここキトウシは何でもできる可能性がある。キトウシ一帯を核として滞在型観光施設を整備し、町内外の人が楽しめ域内に「お金」が循環する仕組みを作るという構想がある。森の木を使い、森を手入れすることにより森が生きてくる。森林活用という側面もある。
- ・参考となるのは、カナダのキャンモアにある公設の複合施設「エベレーションプレイス」。季節や天候を問わず楽しめる屋内施設、宿泊施設を備えており、

3) 「Stand Up Paddleboard（スタンドアップパドルボード）」の略称

子供から高齢者まで年齢を問わず活用できる施設である。

- ・体験型観光を通じて滞在型観光へ発展させたい。また、運営にあたっては、例えばシーズン券を作り、その収入を施設メンテナンスの原資に充てれば、町外の観光客だけに頼らない施設運営も可能と考えている。東川町でやる構想は、色々なことを融合し、突き抜けた発想でやりたいと考えている。

(4) 株式会社 A B K 阿部代表取締役 インタビュー

【原木椎茸関連について】

- ・事業の一つとして原木椎茸を栽培している。自分が使う椎茸の椀木は、木の上部の過ぎない部分に限られている。上川の民有林では、伐採時期を迎えた木を一定区域、一律に伐採しており、間にある天然木を含めてチップにしてしまうため、森林活用としては更に効率的な利用方法があるのではないか。
- ・一方で、秋から開始する新たな事業は、一本の木をすべて活用するアイデアであり、①上部は原木椎茸のための椀木、②中間部は製炭、③下部は木工材、として天然木一本すべてを製品化しようとする取組み。天然木の循環と森林の維持に加えて、事業の持続可能性を確保するため、伐採は年間12～13本程度にとどめ、椀木としては250～300本を目指す。この事業が成り立てば地域の経済波及効果にも貢献できると考えている。

【鹿肉関連について】

- ・鹿肉利用の事業化を検討している。鹿による農地や森の樹皮の食害被害は甚大であり、頭数調整の必要性があるものの、1頭当たり2万円程度の狩猟経費や30%程度という鹿肉の歩留まりの低さから鹿肉の食材利用が進まず、道内の処理場も不稼働などところが多い状況である。このため、鹿肉の食材利用の増進が森林保護につながるという発想。例えば、歩留まりに関しては、通常利用しきれない部位をミンチに加工するなど、一頭すべて無駄なく利用する方針。ブランド化できれば商品価値が上がり、鹿肉販売の経済波及効果と山の保全の両立は可能と考えている。

【関係者のつながり】

- ・地域の皆が協力しつながることで、皆で使える森としての意識が広がることが期待できるほか、経済波及効果が生まれると考える。(椎茸・木炭・家具／狩猟・食肉加工・卸・小売・料理人など)
- ・自然と食育、CO₂削減等環境・森林保全の意識につながるよう、来年には木工職人が所有する森で、マイ箸づくり、原木椎茸、森に関する勉強、音楽、ダッチオーブンを使った料理等を盛り込んだイベントを開催する予定。
- ・北海道で唯一上水道の無い東川町にとって、「水」は大切な資源。水を守る森林の大切さを森林所有者の子の世代にも伝え、皆で使える森としての意識が広がり、私有林の所有・相続問題の解消にもつながることに期待したい。

(5) モンベル 大雪ひがしかわ店 田中店長 インタビュー**【東川町への出店経緯】**

- ・出店の経緯は、写真家の竹田津実先生と当社の辰野会長の関わりによる理由が大きく、東川町が大雪山をはじめとした自然への玄関口であることも理由の一つ。

【キトウシ森林公園の活用策について】

- ・キャンプブームと言われているが、キャンプ場の運営は厳しい状況。理由は、人手不足、安定的な客や売上を確保できないこと、そして冬が課題である。
- ・キトウシ森林公園は道道から遠く、地理的に不利な条件にある。

【森林の経済への波及効果、森林活用ビジネスについて】

- ・例えば、エコツーリズム。東川町は、自然を守るために観光ビジネスに取り組み、稼いだお金で自然を守るという流れができており、他の自治体に比べて自然に対してお金を使っているという印象がある。
- ・最近ボランティアで登山道を整備する人が増えており、今後もそうしたボランティアが増えていけば良いと思う。自然を守るという点では、本来、登

山客など人が山に立ち入らない方が良いが、ボランティアが増えている最近の状況は、自然を楽しみつつ守ろうという流れであり、良いことではないか。

- ・ 当店の初代と2代目の店長は出身が札幌と旭川であるが、退職後、東川町周辺に残っている。やはり東川町は特別な地域なのではないだろうか。他店舗では、退職してその地域に定住するということはあまりない。

(6) 東川町役場 写真の町課 吉里氏 インタビュー

【東川町の魅力、移住の経緯】

- ・ 写真甲子園出場を機に東川町に魅かれ、2010年に大阪より移住し、町職員になった。景観はもちろん、人に惹かれた面が大きい。他の移住者の話では、今後の人生をゆっくり、安心して住める場所を探していたという声があった。若い人には、仕事への懸念もあったが、デザイナー等手に職がある人はインターネット環境によりそうした懸念を克服していた。
- ・ 東川独自の価値観を強く感じている。東川に住んでいることの実感、充実感があるから自分の言葉で話せるのではないかと、そういうところに興味を感じて移住を決断した。「東川スタイル」だと思う。

【写真の町としての東川】

- ・ 写真甲子園も、当初は町民不在のイベントという印象だったが、第12回開催からイベント運営が企画会社から町主体になったことで大きく変わった。町民が中心となり企画委員会を開催、参加者への炊き出し、応援の呼びかけ等で関わりを持ってくれる町民が増えた。当時はピンチだったが、町内に向けた発信のきっかけとなった。町民による持続的な取組の成果として26年間継続していると感じる。
- ・ 写真甲子園は関係人口の増加に大きく貢献している。ボランティアで町外から参加する方、写真甲子園を契機にその後も東川町に来てくれる方もいる。

【東川町民の自然との向き合い方、観光資源としての活用】

- ・ NPO法人が天人峡の夜道を歩くツアーを企画し、観光資源として森林を活用する取組みもあり、様々なところで活動のチラシを目にしている。子供にカメラを提供し、キトウシの森で遊びながら写真撮影する取組なども行っていた。

(7) 東川町役場 海外誘客推進本部 山口氏 インタビュー**【東川町との関わり】**

- ・ 13年前、配偶者の転勤で旭川に住み、NPO法人『ねおす』の事務局員として東川町で勤務した。6年前に東川町へ移住。現在は東川町役場で、外国人留学生に対する就職先紹介斡旋等の出口支援の取組みを行っている。

【森での活動履歴】

- ・ 『ねおす』は、自然体験活動のNPO法人としては北海道内で最大規模。『ねおす』では、子供が森に入り、薪拾いなどを行うことが森の手入れにもつながるという活動のほか、親も一緒に参加したいというニーズがあり、森の中にコミュニティーセンターのような機能を持っていこうという発想のもと、『コミ森』というものを作って各地で定期的に開催するようになった。
- ・ 『コミ森』の参加者は元気があり、「森での体験」のニーズが強かったため、「森でどんなことをしたら面白いか」を考えるようになり、多様な要素を盛り込んで楽しませようと考えた。アロマテラピーやお灸、エッセンシャルオイルづくり、ヨガ、リースづくり等、色々なコンテンツを増やしていった。
- ・ 森で馬と触れ合う体験企画「どうぶつともりづくり」では、地元の高齢者から、かつて森や田畑で馬とともに生活していた話を聞くことができ、子供たちだけではなく、高齢者も参加するような場となった。

【コンテンツの集積】

- ・ 地域で頑張っている活動している人はいるが、一つの要素だけで人を森に引き付

けるのは難しい。個々の活動だけでは、経済波及に結びつかないのではないか。

- ・ 色々な人が森に入ってきて、色々な人とつながって、濃く話し合い、それぞれの取組みを「つなげたい」という気持ちを強く持って頑張っていたが、自分一人ではなかなか全体をつなげられなかった。

【現在の東川町の状況／経済波及について】

- ・ 近年は災害の発生等もあり、環境のことを考える世の中の雰囲気になってきており、旭川や下川、弟子屈でも森の取組みが継続しているなど、森づくりに関する活動は盛んになっている。『森林人口』は従前より増えており、東川でも環境に対する意識が高いコミュニティが良い形で形成されてきている。
- ・ 東川町の人々はいい意味でプライドや頑固さがなく、利益分配も柔軟にシェアすることを考えられるコミュニティであり、外部に向けて売り込んで「一旗揚げる」的な地域活性化ではない、「東川独自のモノ」を感じる。
- ・ このような環境では、森を活用した活動に対して、思いが伝わる「暮らし」側の人達（「経済」側ではない家族や生活者）が応援者となってコミュニティが形成され、経済活動を支える体制ができるのではないか。利益が出れば森づくりに還元することも可能となり、域内循環により経済波及効果がもたらされると考える。極端な考えに偏らず、バランスを保ちながら、頑張りすぎないで、自然環境が良くなるのが良い。

(8) 東川町役場 東川スタイル課 菊地課長 インタビュー

【東川町における「森林」関連産業】

- ・ 東川町の民有林は多くはなく、道有林や国有林が多い。産業面では、本格的な事業場を持つ「木材加工業」はみられない一方、家具・木工業は盛んである。「旭川家具」の約3割が東川町で生産されており、旭川市が34万人都市、東川町は8,300人規模の町であることを踏まえると、東川町にとって家具・木工業は欠かすことのできない大きな産業である。
- ・ 東川町の就業人口の4割弱は、家具・クラフト、木工・製材が占めている。

基幹産業は農業だが、家具・木工に携わる就業人口は農業よりも多い。

【家具・木工業の経緯】

- ・家具工場の従業員や下請けしていた方、移住してきた若い方などが技術を身につけて、様々な形で工房を立ち上げ、旭川家具・木工が成長してきた。
- ・東川町は現在、移住者もあり人口が微増しているが、25年程前にも木工・家具・クラフトの工房を東川町で立ち上げる個人の移住はあった。それは、「北の住まい設計社」から始まっているようなところもあり、「北の住まい設計社」へ続く道路沿いに工房が立地し、「クラフト街道」と呼ばれるようになった。
- ・現在の東川町の事業者は、イス、テーブル、チェストなど一般家庭で需要がある家具を基本に、更にデザイン性の高い高級家具や機能性が高いものへシフトしており、こだわりを持って、しっかりと作っている。

【家具・木工業に対する施策】

- ・今でこそ東川町は「写真の町」として有名だが、かつては「木工、観光、お米」の町としてPRしてきた。家具・木工業は産業としては大きいですが、農業のように補助金等の予算による支援はしておらず、後方支援する程度であった。
- ・現在は、家具・木工産業を町の主要産業として支援を始めている。地方創生推進交付金を活用し、椅子研究家の織田憲嗣氏が収集してきたデザイン性が高く、貴重な椅子などの「織田コレクション」を収蔵し、東川町による公有化を進めており、地元の家具産業にも影響を与えていきたいと考えている。
- ・町内の公共施設には東川町で製作した多くの家具が配置されており、例えば、2016年に開校した東川小学校の棚のほか、生徒の椅子や机も町内の職人が製作している。中学校では3年間、自分の名前入りの椅子を使用し、その椅子を卒業式に持って帰ることができる。椅子や机を大事にするという教育をしており、年に1回事業者に来てもらい、生徒と一緒に椅子のメンテナンスも実施している。東川町では、机や椅子を大事にするということが生徒に

浸透しており、机や椅子に落書きするというようなことはない。

- ・旭川大学のゼミ発案の「君の椅子」プロジェクトは、現在では複数の自治体が参加しているが、2006年、最初にスタートしたのが東川町である。子供たちに「生まれてくれてありがとう」という想いを込めて、居場所の象徴としての「椅子」を贈る取組みであり、東川町で子供が生まれた家には必ず「君の椅子」プロジェクトの椅子がある。

【東川町の取組みにおける民間企業との連携】

- ・企業版ふるさと納税が開始され、東京の企業からも寄附をいただいている。その企業の社長と東川町には接点はなかったが、退職した社員の方の東川町移住をきっかけに社長が来町し、東川を大変気に入って頂いた。東川町が取り組む事業に対して、社長が共感し、東川町を応援したいとの思いから、企業版ふるさと納税に至っている。その資金は、「東川で育った子供たちのために使いたい」との社長の思いから、東川町が実施する人材育成事業などに活用させて頂いている。例えば、4年制大学に進学した子供たちに、返済不要の奨学金を給付している。子供たちには支援いただいた企業のことを説明し、子供たちから社長に対して御礼の手紙を書き、届けている。その内容は素晴らしいものであり、子供たちの考えていることが伝わる良い機会にもなった。

【東川町が大事にしていること】

- ・東川町が大事にしていることの一つは、子供の教育である。地元の産業、人々を子供たちとどうつなげるか。いわゆる郷土愛を醸成することを重視し、生まれたところを誇りに思える事業を進めてきた。
- ・そうした教育を受けた子供は、将来的に東川町の関係人口になり、応援してくれる人材になる。優秀な人材が育てば、将来的に東川町に戻ってきてもらえることにつながっていくと考えている。郷土愛の醸成の重要性や必要性については、行政だけではなく、町民にもそういうことを言う方が多くいる。

4. インタビュー調査からの考察

(1) 階層構造への分類による分析

インタビュー結果を踏まえて、インタビュー調査先が関わる森林には様々な性質が見られたため、性質別に整理するべく以下の3つの階層に分類した。

表2：森林の階層構造への分類

階 層	分 類	概 要
第一階層	自然	自然のもの。 例えば、山（大雪山系）、水など。
第二階層	暮らし	自然の上に築いた、人々の暮らし。 例えば、公園、農地、街並みなど。 第一階層でのハード整備による生活基盤。
第三階層	文化	人々が交流する文化。地域の特異性。 例えば、写真甲子園、クラフトなど。 第二階層でのソフト戦略により培われた文化。

階層別にインタビュー調査先を当てはめると、第一階層に近いところで活動しているのは東川町森林組合、モンベル田中氏、第二階層での活動としては東川町役場、株式会社北の住まい設計社渡邊氏、第三階層での活動としては株式会社ABK阿部氏、natures. 中川氏、吉里氏、山口氏と考えられる。

今回のインタビューで各階層からの声を、東川町の特異な取組や複数の方が共通して有している思いや構想をピックアップすることで、一つの示唆が得られるのではないかと考えた。詳細は、以下のコメント及び図のとおり。

【第一階層】

森林組合：移住者が多い理由は「環境」と「水」、それらを育むのが「森林」。

モンベル：出店理由の一つは、大雪山の玄関口であること。

自然を楽しむことと自然を守ることを両立する流れ。

【第二階層】

北の住まい設計社：木の育成，森作りの思い。家具へのこだわり。

環境を次の世代へ繋ぐ役割。森での子供の教育。

【第三階層】

(株)ABK：森林由来の食材，加工品。

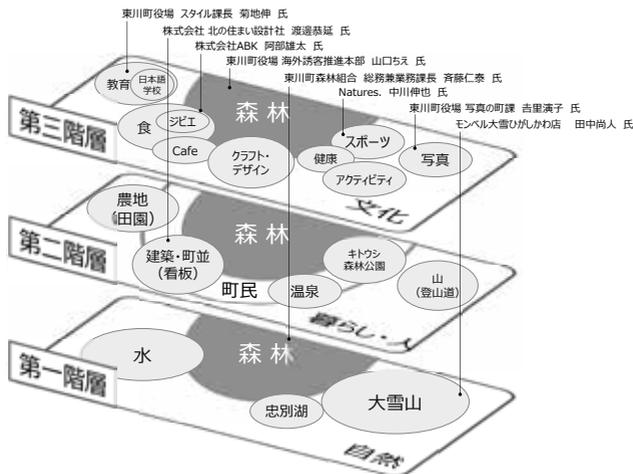
中川氏：キトウシ森林公園の活用計画。子供の山（森）遊び。

吉里氏：写真と写真を通じた人の交流。

山口氏：森を通したコミュニティ形成。多世代とのかかわり。

菊地氏：クラフト街道に見られる集積。デザイン。教育を通して郷土愛の醸成。

図 1：森林の階層構造への分類



(2) 階層構造から見た考察

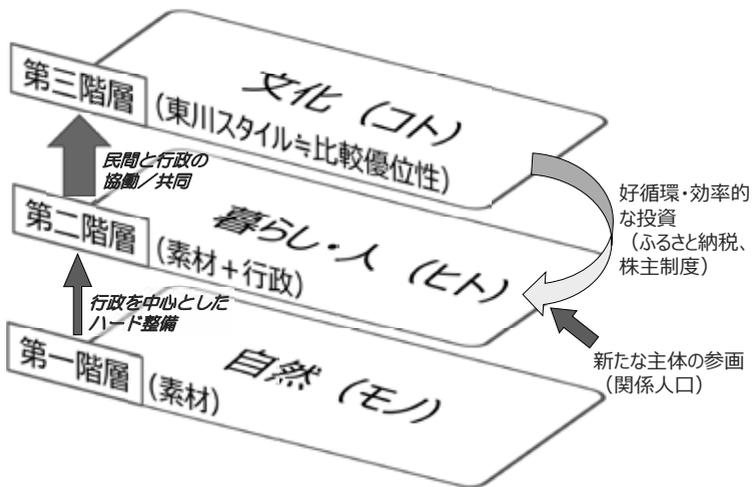
上記を踏まえて第一階層から第三階層の機能と関係性を考えると，第一階層では東川町にある大雪山や水といった豊かな「モノ」の存在が認識され，第二階層では地域資源を活用し，田園や街並みといった景観が育まれている中で「ヒト」が暮らし，第三階層において東川町の特異な文化やブランド（「コト」）の

水準にまで高めた結果、町内外の更なるプレイヤーによる参画や資金を呼び込むこととなった。これらには役場が中心的な役割を担ったほか、町内に加えて「よそ者」という言葉に代表される町外からのプレイヤー、町内の「よそ者」の視点を持ったプレイヤーが関わっていることも確認できた。

特筆すべきところは、その成果が更なる第二階層の活動領域を拓けることに活かされているのではないかと考えられる。

「モノ・ヒト・コト」がうまく循環するシステムが構築されている点が、東川町の現在の活動の原点となっているのではないと思われる。これらを整理した図が以下のとおりである。

図2：階層構造の機能・関係性



5. 東川町における森林資源の可能性と課題

(1) 森林サービス産業の発展

林業の再生、強化については近年取り組みが活発化している。特に世の中の

消費動向が「モノ」から「コト」消費へシフトする中で林業の成長産業化を図るにはサービス産業化の重要性が指摘されている⁴⁾。勿論、木材としての産業や生産性向上がベースとしてあると思われるが森林空間の総合利用が活発化されれば、林業経営としても戦略の選択肢が広がり競争力が上がるであろう。

そもそも昨今議論されている「森林サービス産業」とは老若男女の多様な生活者向けに森林空間が生み出す恵みを活用し、ライフステージに合わせた医療・福祉、教育・学習支援、観光・旅行、娯楽等の付加価値を提供し、さらには複合的にビジネスとして展開されたもの⁵⁾とされているが、こうした森林空間の総合利用が進めば、距離が遠くなってしまった森林と人間の関係性を取り戻すきっかけとなるだけでなく、地域にとって新産業を生み出し、雇用を拡大させる経済循環が期待できるほか、特に移住者である「よそ者」の視点でまったく新しい発想から起業や場合によっては地域企業の承継が促進され、人や資金の流れを形成する⁶⁾効果が期待できる。

現在では、観光政策「明日の日本を支える観光ビジョン」の動きもあり、地域の魅力を高め森林資源と観光を結び付け基幹産業に育てるケースも出てくる。例えば国立公園満喫プロジェクトは全国8カ所の国立公園で展開され、北海道では阿寒摩周国立公園でコンテンツの磨き上げが推進されており、様々な挑戦が行われている⁷⁾。また、釧路市阿寒町では体験型ナイトウォークとして「カムイルミナ」を2019年7月から開催し、プロジェクション・マッピングの技術を活用し暗闇の森の中でアイヌ神話等をベースとした映像を楽しむなど、まさしく先進的な森林空間の活用も始まっている。

先述のインタビューの中でも起業した移住者によって、キトウシ森林公園の

4) 「森林サービス産業」検討委員会 報告書「森林サービス産業」の創出に向けて～新たな森と人とのかかわり「Forest Style」の創造～(2019)

5) 前掲書 p28より

6) 前掲書 p25より

7) 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議 第8回観光戦略実行推進タスクフォース資料5：https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/kankotf_dai9/siryou5.pdf

新たな利用について構想が語られたり、木工業のある町らしく、学校で木の椅子が生徒に提供されるなど森林資源と地域の産業や生活が密接につながり、広く森林空間の総合利用がなされている。したがって、東川町は木工の文化や教育の側面、また森林の中で楽しむアクティビティなど観光の側面も含めて森林資源が多方面に利活用され、その中で関係人口も増やし、さらには大雪山による荘厳な景観や豊富な地下水など人間本来が求める自然環境が定住者や観光客へ何ものにも代え難い価値を提供している魅力的な町と言える。

近年では2015年に国連サミットで採択された持続可能な開発目標、いわゆる17の目標に向かうSDG'sは世界全体でその意識が高まっているが、森林、林業はこの方針に非常に多くの要素が関わってくる。地球環境保全機能や生物多様性保全機能などを始め8つの森林の多面的機能は直接的にその持続可能性について貢献するものであり、地域がそれらを活用し価値を高めることは非常に重要である。したがって、SDG'sの観点からも森林サービス産業の発展はまさしく森林の利活用、保全を促進し、継続的に地域の雇用を生み出すことにもつながり経済循環を拡大させる。

(2) 東川町における課題や展望

当共同研究チームにとって現時点では情報収集が限定的であり引き続き東川町や他の地域との比較調査は必要であるが、インタビュー内容も踏まえ今回の調査段階では以下の課題があると考えられる。

モノ	}	①森林管理、保全に対する更なる取り組み
(森林基盤)		②地域が連携するプラットフォーム構築
カネ	}	③起業やその後の事業継続に必要な資金の確保
ヒト		④林業及び森林サービス産業の経営人材育成
情報	}	⑤地域のプロモーションやイベント企画を行う人材確保
		⑥「地元」との相互理解促進

まず、森林基盤としての「①森林管理、保全に対する更なる取り組み」についてであるが、国産の木材は、価格の影響で輸入材に押されている状況や製材工場の数が限られているなどの制約から使用されなくなったり、薪炭が使用されなくなったりなど手入れがなされていない荒れた森林が増えてきている⁸⁾。全国的な事象としてあるようだが、実際に東川町でのインタビューでもそういった声が聞かれ、子供たちが森林に近寄りにくくなった一因とも言えよう。財源や人手も問題もあるが、特に森林空間の総合利用を継続していく上でも不可欠な取り組みである。また森林管理、保全を持続的なものとするためにも地域の各分野における機関や関係者が連携し森林を保全、管理する「②地域が連携するプラットフォーム構築」も重要であろう。ステークホルダーが多くなり立場が異なれば、仮に良い森林づくりとしてコンセンサスが取れても方向が違ってくるため、それぞれのメリットが享受されるよう企業、地域、社会のWin-Win-Winの関係が求められる⁹⁾。そうした森林の利活用における利害関係が調整できる話し合いの場、方向性を確かめられる産学官連携などの協議体の活用が求められよう。

次に「③起業やその後の事業継続に必要な資金の確保」である。森林整備に関する補助事業や基金などは見られるが、サービス業としての視点から起業意欲を促進する金融支援が充実していると、地域にとってチャレンジの機会に恵まれるのではないか。地域の金融機関や企業などが中心となったファンド組成や、金融機関による創業支援・成長支援といった取組みが期待される。昨今においてはCSV (Creating Shared Value)、社会的価値と経済的価値を同時に目指す企業の出現も待たれており、東川町はそうした企業モデルが増えていく素地もある。

そして人材面であるが、従来の林業としても、そして森林サービス産業としてもその経営力向上は必須である。現在のTPPによる取引の変更や第4次産業

8) 林野庁 (制作) 「企業事例で見る森のCSV読本」林野庁 (2015)

9) 宮林茂幸 (編著) 「森林づくり活動の評価方法-企業等の森林づくりに向けて」全国林業改良普及協会 (2009) p118より

革命という劇的な環境変化の真っただ中において「④林業及び森林サービス産業の経営人材育成」は需要の大きいものであろう。北海道は農林水産の第一次産業が盛んな場であったが、サービス業である第三次産業が多様な広がりを見せており、林業及び森林サービス産業の拡大による森林の利活用のための施策がさらに期待される。そして強力に地域を活性化する「よそ者」の視点を持つ人との関わりを維持するため、「⑤地域のプロモーションやイベント企画を行う人材確保」にも引き続き目を向けていくことが重要だ。移住者による活躍が目立つ東川町であるが、「よそ者」に限らず、常に新鮮な目線で地域を見つめる視点や発想を生み出していく人材を確保するためにも、引き続き外部の注目を惹き付けて、多様な交流を作り出していくことが求められる。

最後に「⑥「地元」との相互理解促進」である。今回、当共同研究チームが行ったインタビューの対象者の多くは移住者である。外から東川を見つめ、その良さを語れる人物であったが、生まれながらにして東川町で生活している人々もたくさん存在する。すべての人間が同じ価値観ということは考えられないが、この東川町にとって豊かな森林資源の利活用が、持続的な町づくりに生かす一つ方策として地域全体で理解を深めていくことも重要であろう。

当共同研究チームは以上の分析や課題について、東川町でセミナーの開催を企画しており、直接地域住民へ本調査結果を報告し、相互にディスカッションを行うことで今後さらに調査を深める予定である。

参考文献・資料

- 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議資料「第8回観光戦略実行推進タスクフォース資料5」(2017) : https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/kankotf_dai9/siryou5.pdf
- 寛裕介『持続可能な地域のつくり方 未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』英治出版 (2019)
- 近藤久美子『CSV経営とSDG's政策の両立事例』ナカニシヤ出版 (2017)
- 「森林サービス産業」検討委員会報告書『「森林サービス産業」の創出に向けて～新たな森と人とのかかわり「Forest Style」の創造～』(2019)
- 玉村雅敏・小島敏明『東川スタイル 人口8000人のまちが共創する未来の価値基準』産学社 (2016)
- 写真文化首都「写真の町」東川町『東川町ものがたり 町の「人」があなたを魅了する』(2016)
- 名和高司『CSV経営戦略』東洋経済 (2015)
- 村上周三・遠藤健太郎・藤野純一・佐藤真久・馬奈木俊介『SDG'sの実践 自治体・地域活性化編』事業構想大学院大学出版部 (2019)
- 宮林茂幸(編著)『森林づくり活動の評価方法-企業等の森林づくりに向けて』全国林業改良普及協会 (2009)
- 林野庁『企業事例で見る森のCSV読本』林野庁 (2015)
- 林野庁資料「林野庁におけるSDG'sの取組」(2019) : <https://jp.fsc.org/preview.sdgs.a-577.pdf>